



小田小だより

平成28年 9月号

〒236-0052 横浜市金沢区富岡西1丁目69番1号 TEL 045(775)3011

<http://www-local.edu.city.yokohama.jp/sch/es/koda/>

横浜市立小田小学校



感動と夢を子どもたちと共に ～2020年、東京五輪に思いを寄せて～

学校長 木村 昭雄

長い夏休みを終え、にこにこ顔の元気な子どもたちが久しぶりに学校に戻ってきて、昨日から前期後半がスタートいたしました。これも保護者、地域の皆様方のご理解とご協力の賜です。ありがとうございました。しばらくは厳しい残暑が予想されますが、9月に入れば確実に秋を迎えます。実りの秋に向かって、この元気な子どもたちに、ますます笑顔があふれる毎日となるように教職員一丸となって努力して参ります。

ところで、今年の夏休みの大きな思い出の一つに、スポーツの祭典、リオデジャネイロ五輪をあげる子どもたちが多いことと思います。音楽大国ブラジルにふさわしく、波の音と共にリオの映像が映し出され、ジルベルト・ジルの名曲「アケリ・アブラソ～リオはいつまでも美しい」で始まった17日間。28競技306種目で206の国と地域から1万人を超す精鋭による躍動、ドラマにスポーツのすばらしさと感動を覚えた17日間でした。

私も深夜の「LIVE」放送に見入りながら、選手の身になって緊張したり、目頭を熱くしたりすることが何度もありました。名場面も数々生まれました。保護者の皆様方や子どもたちには、どんな場面が印象に残りましたでしょうか。

圧巻の演技だった体操・内村航平選手の鉄棒。ここまで美しくなれる……。ため息が出るほどの超美技は世界をも魅了しました。最終種目で劇的な逆転劇があった体操の男子個人総合。試合後の記者会見で「審判から好意的に見られているのでは？」と内村選手の採点に疑問を呈する質問が出ると、逆転負けで悔しくないはずはないオレグ・ベルニャエフ選手が「いったん得点が出ればフェアで神聖なもの。そういう質問は無駄だと思う。」と言い切り、かばいました。折しも私の大学時代の友人から、「……私がさらに感動したのは翌日の新聞に載ったオレグ選手についての記事です。ウクライナは内戦に苦しみ、財政難から練習器具もまともになかったそうです。それで彼は世界各地で開かれる大会に毎週のように出場し、賞金を稼ぎながら試合を練習代わりにして力をつけてきたそうです。憧れ、尊敬する内村選手に対峙するために。これからは日本の選手同様に彼の応援もし続けようと思います。」という納得のメールが届いたのでした。

日本レスリング会の顔として数々の重圧に耐えてきた吉田沙保里選手が決勝戦で敗れマットに突っ伏した瞬間は、今、思い返してもこみ上げるものがあります。その吉田選手が後日、「一人では強くなれない。こうやって仲間がいて、後輩がいて、いろいろな人の支えがあってここまで私も切磋琢磨しながら強くなれた」との談話が新聞で紹介されていました。

結果だけに感動したのではなく、これまでのプロセスを知るが故に深い感動を覚えたのでした。その国の代表としてオリンピックに出場するだけで十分に素晴らしいことです。血のにじむようなプロセスは、メダリスト以外のどの選手にもあつたに違いありません。

あと2ポイントで負ける……という土壇場から、驚異の精神力で5ポイント連続奪取で大逆転し、日本のバドミントン界に初の金メダルをもたらしたのは松友美佐紀選手と高橋礼華選手のペア。チームワークで進撃した陸上男子400mリレーの4人の侍もあつぱれでした。この奇跡的な銀メダルは、個人スポーツでも心のつながり次第でチームとなり、プラスアルファの力を発揮できることを象徴的に表しています。メダルラッシュもさることながら、筋書きのない人間ドラマが私たちの胸を打ちます。諦めなければ、支え合えば底力を出せる……。励まされた被災者の皆様も多かったことでしょう。

閉会式の降り注ぐ雨さえも、祝福のシャワーに感じるほどの笑顔と音楽にあふれる歓喜の空間がそこにあると思えました。時代が変わり、国際情勢が動いても、「スポーツを通して、体と心を鍛える。世界の国々と交流し、平和な社会を築いていく」という五輪の精神は色あせることはないでしょう。東京は、そのバトンを受け取りました。リオでは五輪に続き、パラリンピックが9月7日から18日まで開かれます。

これからも感動と夢を子どもたちと共に抱き続け、それを力にしていける小田小学校でありたいと思えました。前期後半もご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。